

「細く長くひとやかに」





山本貞治

日本橋小網町生まれの江戸っ子。東京
高科大学卒業。宝永元年（1704年）創
業の日本で唯一の楊枝専門店「さるや」
の七代目。平成二十七年自分史編集。
「細く長くしとやかに」がモットー。

第一章 序章

| | |
|--------------|------|
| 一 幼年時代 | 3 P |
| 二 少年時代 | 4 P |
| 三 六州会と安藤先生 | 5 P |
| 四 府立一商時代 | 6 P |
| 五 商大入学と寮生活 | 6 P |
| 六 バレー部の友達 | 7 P |
| 七 入隊から一〇二部隊へ | 9 P |
| 八 立川より岐阜へ | 10 P |

第二章

| | |
|---------------|------|
| 昭和二十年代（百貨店進出） | 14 P |
|---------------|------|

第三章

| | |
|---------------|------|
| 昭和三十年代（駅ビル進出） | 15 P |
|---------------|------|

第四章

| | |
|---------------|------|
| 昭和四十年代 若葉会木曜会 | 17 P |
|---------------|------|

第五章

| | |
|------------------------|------|
| 昭和五十年代 町会長、神社総代、信用金庫理事 | 19 P |
|------------------------|------|

第六章

| | |
|---------------|------|
| 平成年間 新ビル建設新店舗 | 20 P |
|---------------|------|

附録

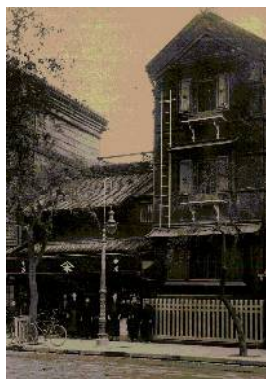
| | |
|---------------------|------|
| 旅は道づれ 世は情け | 21 P |
| 父母と兄弟、妻と子供達 | 21 P |
| 新聞記事：日経新聞1997年8月25日 | 24 P |
| 新聞記事：日経新聞2011年10月5日 | 25 P |
| 雑誌記事：東京散歩2011年秋冬版 | 26 P |
| どぜう往来：2009年冬第102号 | 27 P |

第一章 序章

一 幼年時代 大正七年九月六日日本橋小網町にここの声をあげた。暑い盛りの中であるとよく母が話をしていた。何でも急に生まれたそうで、この子はせっかちになるよとよく言われたものである。その通り今でもせっかちである。兄が一人居り、よく子供の時に連れて行って貰ったものである。その頃の人形町界限は子供が多く、人形町通りの裏の元大阪町附近には大勢集まり、面子、石けり等でさわいだものである。親父橋の下には堀割のような川が流れておりその川辺の近くまでよく降りていったものである。幼稚園に入園して東華小学校まで通った。家から五分位で近所の子供も多く、大変賑やかで生徒数も千人位いたものである。

幼稚園の頃、有名な関東大震災が起こった。私は幼稚園から帰った処で確か家で食事をしていた時であった。隣の倉庫の壁が崩れ落ちて、大変な事が起こったと子供心に感じたものであった。その後どうしたのか覚えていないが叔父に連れられて母と兄妹と逃げる事になった。前の道は多くの大八車が通っていて危険であったので、左に曲がって鎧橋を渡る事になったが兩岸には既に火がきていて、誰かが「橋が落ちるぞ」と大声をあげていた。橋をかけ抜けて一目散に逃げてホットしたものである。その叔父と一緒に宮城前に逃げたがすでに馬場先門には大勢の人がいて宮城の中に入れない。そこで、その場で寝る事となった。父や店の人はどうなっているか判らなかった。夜のとぼりが開いて朝になった。人込みをかいくぐって宮城前に出ると父と店の人が一団となって集まっていた。それからが大変、総勢二十人余りで目黒に向かって出発した。叔父の家である目黒の家には大勢の人が集まっていた。その夜のことである。朝鮮人騒ぎが始まって大人の人達が竹槍をもって家の前に立っている。朝鮮人が暴動を起こしたという話であった。後で判ったがこれはデマであったのである。

一週間位してから日本橋に母に連れられていった事がある。掘立小屋が立っていて、そこで父が働いていた。今から考えると大変苦勞された時であったと思う。



二 少年時代

大正十五年四月東華小学校に入学した。最初の担任は林先生という名であったが、すぐ変わって吉野先生という女の先生になった。二年になると安藤先生が北海道より着任した。若く大変情熱があり、又、一生懸命な先生であった。専門は国語教育であった。私の属した竹組は男女組で男子三十余名女子は十三、四名であった。皆仲良く下町らしくタエちゃん、ピヨちゃんとちゃん付で呼び合い、名字を言う人はなく、この老人になっても未だちゃん付である。小学校の友達は本当に懐かしいものである。三年の頃に、二年間学校が新校舎に建替の為、有馬、浜町に分散して授業を受けることになった。二年後、校舎が新築して戻ることになった。この組は勉強のできる人が多く、優等生が毎年七人位出て、学校中で有名であった。その中に女の人が出て、これが有名な小塩薫子さんである。男女組というのは年をとっても良いものである。卒業後は級会をやっても男女一緒に和やかなものである。国語教育には参観があり、安藤先生の国語教育は当時の東京市でも有名であったらしい。先生も若く、荒城の月を唄ったり、北海道の鮭の話をして、本当に先生と児童が一心同体となっていたと思われる。卒業後も毎年一回交替で幹事をやり、級会は数十年続いた。特に田中孝治君が一まわり下の級にも拘わらず参加された。この毎年の級会は「行こう」という事を大変有意義に考えている。



三 六州会と安藤先生

小学校二年で安藤先生がみえてから、私達と先生とのお付き合いが始まった。皆近所の人で、卒業後も毎年級会を開いた。一度も欠かさなかったのが私達の誇りでもある。中学時代大学時代、先生の処に年始に行くのが恒例であった。田端のお宅、高円寺のお宅には毎年伺ったものである。最後には先生も校長先生となり、鷲の宮に新宅を建てられてお宅も立派になった。一番級会として大変だったのは戦争中であったと思う。中学卒業後逐次戦争となり、兵隊にとられる人が多く級会の人数も減って、毎年級会を開くのが困難になってきた。関谷、西堀両君などが主として級会を続けたものである。この間滝沢君が戦死したり、残っていた私達も戦争にかり出されて、それは大変な事だったと思う。幸い女の人がいたので、細々ながら級会を続ける事ができたのである。

戦後、安藤先生が神田の千櫻小学校の校長先生になってから級会が復活した。十名以上が集まる様になった。それから世の中が落ちついてきたので旅行をやるようになり、先生も御夫妻同伴で参加される様になった。箱根熱海温泉で級会をやる様になった。安藤先生も日本橋常盤小学校の校長先生にまで栄転し、最後に定年となった。その後中央区教育委員又委員長を歴任して教育界を終わった。東華小学校の先生のOBとしては、小菅先生と共に大変有名になった。級会も卒業後三十周年、四十周年、五十周年と続けて行ったものである。その間、橋本兄、小竹兄と有力な友人が若くして亡くなり、大変淋しくなった。よはい七十年を過ぎて還暦の祝、古希の祝、米寿の祝を熱海で催して、相変わらず小学校時代を偲んでいる。安藤先生の叙勲の時、小菅先生を初めとして教育界の人々を我々級会で如水会館に呼んで祝賀の宴をやった事がある。先生としても生涯一番の嬉しい思い出の日であったと思われる。御夫妻の写真をとられた時の嬉しそうな顔は今でも思い出される。その後、教育委員を一生懸命つとめられて激しい仕事の為身体をこわされ、病に伏せられる事になった。七十才を越えてからの事である。これより七年位病床にあった。先生の奥様の看病は大変なもので御苦勞の連続であったと思われる。この後、先生の奥様が先に亡くなられ、先生も二週間程して亡くなった。私は葬儀委員長を任せられ、微力ながら葬儀を行った。思えば級会と安藤先生は私にとって一生の貴重な思い出である。



四 府立一商時代

府立一商は渋谷針山にあって、一中一商と言われ秀才学校の誉高く、特に商社の人材が集まり、日本橋方面より進学する人が多かった。その頃（昭和六年）市電が両国から渋谷行が出ていて一本で行けるので便利であったし、各駅から同級生が集まってくるので面識もあり行き帰り結構楽しいものであった。

一商に入学すると、一年の担任は稲垣先生という人であった。算盤が大変やかましく、商業学校でもあったので算盤の九々を一時間暗誦させられた。担任のせいか算盤に造詣が深く、特に暗算が得意であった。それで二、三年生になると夏には算盤の夏期講習、特に夜間に神田の学校に稲垣先生も出張されて二時間位練習をした。この夜間塾は上級生も一緒に、十人位で特別教育の感があった。又一商で算盤の全国大会があり私も選手として出場し暗算競技に参加した事もある。後年、商大に入学してから稲垣先生が商大の講師となってこれ、競算部から商大に入学するのは珍しいと言われた。

四年生になると、受験組として毎日三時より補修授業があり渋谷先生、中村先生の授業があった。商業学校は普通中学より学力が遅れているというので夜中二時頃迄は勉強しないと入学できないと脅かされたものである。私は商大予科を希望したが毎年予科には四人位しか入学できず、特に数学が難しかった。それで専門部横浜高商に進む人が多かった。

四、五年生になると校長先生が代わり、中崎長九郎という訓育主任がきて一高は軍国主義になった。塾を作り武道館を作るなど軍人色一色になり、昔の商業学校の面影が薄れていった。今思うと昭和維新の感があり、指導者によってこうも代わるものかと思つづく感ぜられる。

商大予科一つしか受けなかったのも、一年目は入学不合格、浪人生活に入る事になった。たまたま四中の補習科にうまく入れたので、灰色の一年を送る事になる。櫻の季節は本当に淋しいものであった。皆が入学して生き生きしているのに一年遅れるという事は非常に残念であったが、これも人生かと慰めたものである。

五 商大入学と寮生活

昭和十二年四月に商大予科にめでたく合格した。一年遅れであったが念願の入学を果たし、世の中はバラ色に見え出した。一商から毎年四名位しか入学できず、入学した時も商業学校出身は六名で各組一名であった。五組に入ったがフランス語組であった。級で商業出は私一人であった。一中、四中の出身が多く、大学生活はここから始まった。その頃商大予科は全寮制で北寮に入る事になった。寮長は鹿児島出身の小牧さんであった。この人は豪傑で予科の総務理事になった人で、面白い人であった。他に藤井、石田、下元、藤塚がいた。入学した時は、私は下町育ちで講談クラブキング等の雑誌をもっていったが、他

の人は皆大分レベルの高い文学書をもってきていて恥ずかしい思いをした。入学式の後、寮でストームがあったりして、昔のバンカラの高等学校と同じであった。今でも感ずる事であるが、全寮制であったので他の組の人々とも交遊があり、卒業しても商大生は連絡がよく又学生数が他の大学より大変少なかったので交流が非常に良かった。

学校の授業は語学が多く、毎日六時間の内英語フランス語が二時間あるという内容で語学に力が入っていた。先生も皆有名な方で、担任の中村為治先生は独特の授業であった。どうも商業出は語学が弱く他の人と比べると大分落ちるので、ついていくのが骨が折れた。算盤と簿記があったので、総体ではまあまあで落第する心配はなかった。

算盤は川村寛治先生という日本一の先生が受けもった。商業生の神様みたいな人に教わって甚だ光栄であった。予科では他に川上多助とか三浦新七とか有名な先生の授業を受けることができて大変感激したものである。

又、学長の上田貞次郎先生の授業が三年の時あった。その時将来の話をされて、サラリーマンよりも自営の道を進めという話に大いに激励されたものである。運動をしていたので学期末の試験には骨が折れたが、何とか無事卒業できて大学に入ることになる。

国立の大学は環境もよく、角帽をかぶって毎日、国立まで日本橋より通ったものである。当時は電車の時間がかかったので、教練以外は朝早く出る事もなく十時半まで出かけて午後には運動の練習をするという日々であった。二年の時大東亜戦争が始まって、半年繰り上げ十七年九月に卒業することになる。

大学では金子鷹三助先生のゼミに入った。ここは運動部の主将の集合所で各部の猛者が入っていた。先生は温厚な方で色々とお世話になり卒業後婚礼の時には仲人をつとめて頂いた。奥様、お嬢様にもお近付をえている。就職の時は先生の御紹介で日本ゴム（ブリジストンタイヤ）に入ったが、見習で九州の久留米に一週間ただけで復員後会社をやめ家業を継ぐことになる。

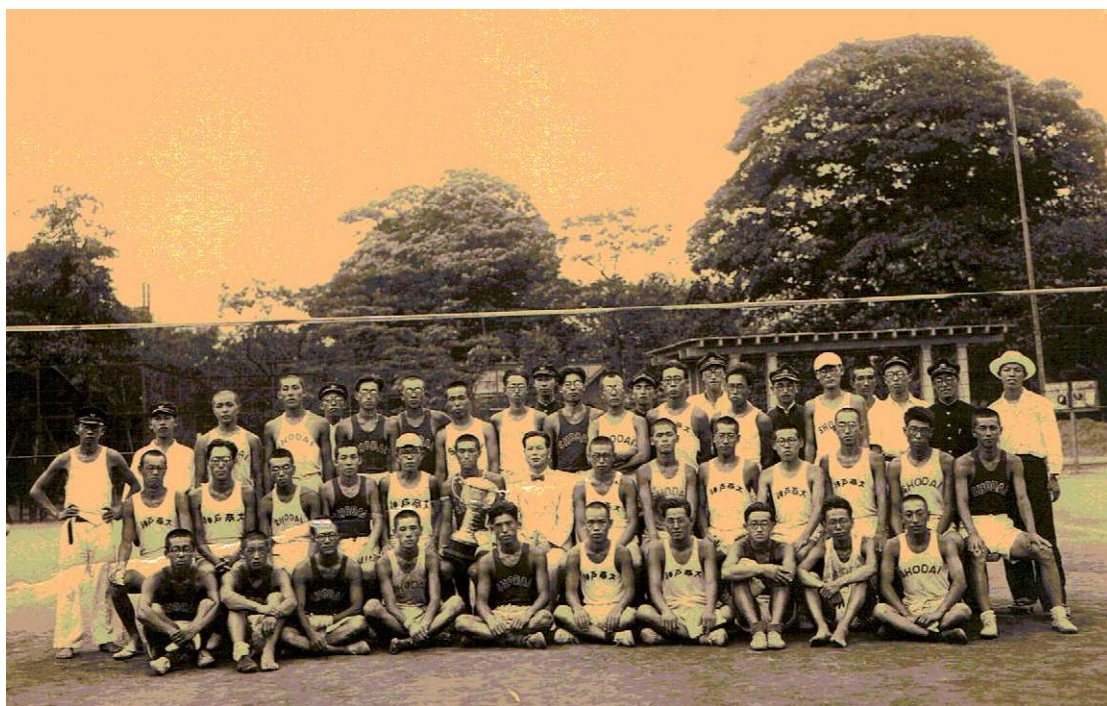
六 バレー部の友達

商大に入学してからバレー部に籍を置く事になる。大学生活は即バレー部の生活となった。学校に行くより練習をする事が多くなる。商大バレー部は創業時代で入部した時は十人位しか部員がいなく、大学リーグではいつもビリであった。私達予科生はボールをもって浜松町に通った。試合はいつも負けばかりで、見ていて弱いなあという感じであった。一年上の関口さんが「俺達の時代になったら必ず上になる」と言って居られた。合宿は国立でやっており、のんびりとしたものであった。二年になると中村、本郷という名手が入ってきて、徐々に商大バレー部も強くなった。私等は珍しく入部者が多く、九人位入った。卒業まで七人残り、商大全盛の中核となった。一年の時ボート部の級対抗戦が

あり引っ張られてバレー部の人に怒られた事もあった。ボートの練習で向島に行った良い思い出がある。バレー部も脇坂、栗田、新谷、浅野、秋永、児島と人数だけはいて予科リーグに出場し、関口さんの代を含め、三連勝して予科の覇者を続けた。三年の時優勝の威勢をかって全国高専大会に出場したが、京都で一回戦に二試合とも負けて残念な思いをした。予科三年に大学リーグに少し出場させてもらったが、何分にも運動神経が良いほうでなかったから、大学に入って専らマネージャー専門になった。商大バレー部も私等の時代を頂点として段々と下って行くのである。商大バレー部の友達は卒業しても一番親しい友達である。同年の村井勉、秋永銀二、児島智昭、栗田裕、脇坂由助、浅野一郎と数は多かった。

既に脇坂君は戦死、浅野君は病死した。岡口、城所の両先輩も病死した。一年下の岡田保夫、桑江定雄君も死亡し、残るは志水君一人である。二年下の私が入部させた九人は皆元気である。その下に落合、池田、米倉功、川勝等バレー部は全員団結よく、社会にでも有名人が多い。商大運動部では突出した出世振りである。どこが良かったか判らないが、皆素質があったのではないかと思うが、私達の誇りである。

私の子供達も就職の時、馬淵先輩、岡田君又阿部君のお世話で三菱石油や朝日生命に就職させてもらったものである。





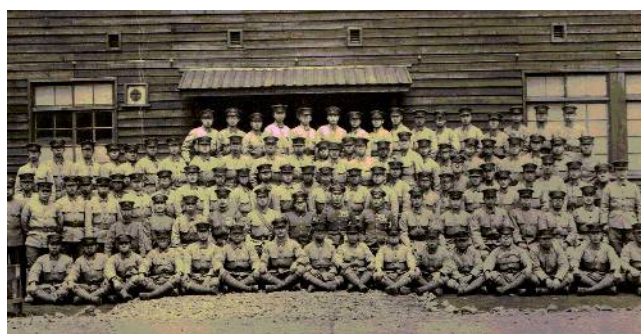
七 入隊から一〇二部隊へ

昭和十七年十月一日、私は豊四季の一〇二部隊に入隊した。飛行兵隊の通知がきた時は、飛行兵という事で家族は珍しがった。まだ兵隊の中に航空兵というのは聞かない時代であった。近所の人や友達が集まって来て、小網神社に参拝して出征したものである。野田の叔父さんが柏駅まで送ってくれた。豊四季につくと兵隊が迎えにきていて、駆足で隊までつれていかれた。兵庭に集まり、隊の編成がきめられて、私は熊谷班に入った。二、三日はお客様扱いであったが、三日もたつと本当の軍隊の教育が始まった。初めは新兵である。訓練は飛行場で気を付けから始まった。教えるのは班長である。号令のかけ方は学校の軍事訓練と違って大変特徴があった。教官は見習士官であった。学校の時は配属将校は大佐であったが、隊に入ると見習士官の偉い事。班長の下、士官古兵の兵長、上等兵のこわい事が思ったよりすごかった。毎日のごとくピンタが飛ぶ。内務班の中をコマネズミの様に兵隊は朝六時から就床まで働きづめで暇がない。ほっとするのは食事の時だけである。掃除、洗濯、銃の手入れ等仕事は山ほどある。要領の悪い人は朝から晩までピンタの連続である。廻りを見ても赤い軍帽の兵ばかりで、何だか気がおかしくなる。ある日、隊の外の牛をみてホットした事は今でも覚えている。一月位すると、整備兵など学科と実習が始まった。教育するのは班長である。将校は「作業始め」とか言って只作業を待っているだけである。

一〇二部隊は第四航空教育隊といって兵隊の教育部隊であったのである。六ヶ月の教育が終わって、坐金ついた上等兵になった。幹部候補の試験があつて甲幹として三百五十名が合格した。

私は上から六位であった。軍隊は序列順に名前を言うのである。又中隊ではトップであった。それで立川に行く時、中隊長に申告した事がある。幹候の試験の前には随分と勉強したものである。厠に入っても軍人勅諭を暗誦した。幹候の試験も六位であったので、これから将校をすべる事はないと思い、その後の試験はサボル事とした。後で感じた事だが立川へ行った時は序列はトップで、

岐阜に入った時は将校のビリであった。将校集会所で食事をする時も序列順で私の下は各部の将校であった。一〇二部隊の七ヶ月は上等兵で、立川へ行く前は教育なく、食べる事と適当に運動したので、私の一生で一番太った時である。確か六八キロ迄上がった事があった。その時鹿野さんが下に入ってきて、その隊に行き色々と様子を教えたものである。新兵には上等兵が偉く見えたに違いない。いよいよ福生に行くことになる。福生はすごくしぼられるというので一〇二部隊の教官が駆足行軍を何度もやってくれた。鬼の福生整備学校と定評があったらしい。



八 立川より岐阜へ

昭和十八年三月に立川航空整備学校に移った。一〇二部隊で伝染病があり、期日より三日遅れて立川整備学校第二中隊に入った。一寝室の二番であった鬼の福生と呼ばれるだけあって、ここの教育はしれつを極めた。区隊長は柴田見習士官であった。一〇二部隊は四教と呼ばれ、この一寝室は六教、八教など他の教育隊の人が一緒にはいった。午前中は航空機学発動機学の学科、午後は訓練である。発動機、飛行機、機体等航空に関する勉強である。この学科はよいのであるが、夜になると非常呼集がかかり、夜間の駆足行軍である。福生から青梅街道を通過して御嶽山山上までというひどい訓練の時は、落伍者が半数以上も出るというさわぎである。いつも私は落伍者で隊まで帰ってきても大変怒られたものである。

将校教育とはいえ、特にはげしい訓練をしたものである。面白いことにカレンダーを毎日消していく人がいた。大体六ヶ月とと思っていたが、整備学校は十ヶ月という事であった。後で同期の他の兵科のものが見習士官になっている時に、私達は坐金のついた軍曹で相変わらずしぼられていた。夜駆足行軍をやり、日中眠い所に発動機学など機械の事などわからない事を教えるので頭に全然入らず、学科の試験は全部白紙で出したものである。

秋に入った頃、私のとなりの杉上候補生が急にいなくなった。その彼の出した手紙が検閲にかかりスパイ容疑で軍法会議にかけられたのである。これで中隊長が代わり、村上大尉という隊長が着任したのである。いやな男であった。

前の板垣大尉は陸士出で颯爽としていたので大変な違いになった。凡ての事がこまかくうるさくなった。毎日陰うつ時代となった。区隊長連も影がうすくなった。これが秋から冬と続き何とか卒業していくのである。

岐阜に移ったのは昭和十九年二月の事である。見習士官二十名、途中で遊んで隊に入った。遅刻という事で本部付の笠原中尉に先ずお目玉であった。早速配属が決まり大山隊に入った。古ぼけた隊舎で陸士出の中隊長であった。少年航空兵の教育であった。教育に当たる前1ヶ月位将校教育で、屋島中尉、斉藤大尉が将校としての心得動作の訓練を行った。兵隊と違い営内居住でも将校であるので、待遇が変わり隊付は暢気なものであった。吉田少尉付の見習士官で将校についていけばよいので大変楽であった。その間学科だけは担任させられた。中隊を二つに分けて相原見習士官と二人で学科を飛行兵に教えるのである。飛行機学というものであった。福生で殆ど勉強してなかったので教育するには大変であった。それで夜になると特訓、明日教える教材を隣の伝法見習士官に教えてもらうのである。四時間教えるのでその量が多く、毎日予習が大変であった。何しろ教えるのであるから自分が理解しないと教えられない。大学の時より勉強して毎日教育に励んだものである。午後の学科は学校訓練と同じで、午後になると息を吹き返した。四教時代の仲間の河原君と休日には一緒に外出して岐阜市内を歩いたものである。

六月になると九中隊が開設されその隊に移った。少尉候補者上がりの窪田中尉で年とった感の人であった。前任将校が池田少尉というこれ又少尉候補者上がりであった。ここで区隊長を命ぜられ第二区隊長となり、特幹を受け持つことになった。この時も学科は電気工学で、これにはホトホトまいてしまった。予備知識がなく毎日教えなくてならぬので苦労の連続であった。二ヶ分隊を受け持ち、中山軍曹という元気の良い人が班長さんで、よく私を補佐してくれた。この区隊の時自分が兵隊の時よくピンタをくったのでピンタをするのを止めようと思って、なるべくこれを実行した。週番をとった時など一度夜間点呼をしてから又各寝室を廻って各班長、古兵のピンタを防ぐ様努力した。

この頃、部隊はどんどん拡張して中隊の数が増加していった。航空隊が少なかったからである。七月になって暫く士官をして少尉となり営外居住となる。岐阜市内の伊奈波山のそばの下宿屋を馬淵さんの親戚の山内さんが見つけてくれた。この山内さんは白味曾商で岐阜の名家であり大きな店であった。この山内家に大変御世話になり今でも大変感謝している。九中隊に三ヶ月いて後、四中隊に編成換になり関口隊に移る事になった。特幹の教育である。中隊長は陸士出の若い関口大尉。大変元気のある面白い人で幹候の将校ばかり集めた。この区隊長をつとめた中隊長の方針で「泣いて訓練笑って戦え」というので、兵士には厳しくピンタの山であった。私もこれに倣ってピンタの連続となった。特幹の兵にとっては悲しむべき状況である。私は初めあまりやらなかったが、

他の将校がびしびしやるので止むをえずピンタの雨をふらせた。ひどい時には朝礼で全員ピンタをした事がある。中隊の兵士二百名往復ピンタで四百回、手が痛くなるのは当然であった。この中隊の頃、私の区隊より三人栄養失調で死んだ。関口中隊長は逃げて、私が葬儀委員長になり葬式を行った。通夜では兵に登壇の両列に剣突鉄砲で立たせ軍隊の葬式作法で行った。両親がきて挨拶をさせられ、戦死には違いないがまさか栄養失調とも言えず両親には大変気の毒であった。三日も葬式をやって本当に嫌な思いをした。四中隊の特校達は蔵さん、下川さんとか面白い人が多く、今でも付合をしている。関口さん、蔵さんは当時既に嫁さんがいて私も度々御伺いして酒をのみかわしていたものである。当時の岐阜選校の将校達は年一回の会合をしている。四中隊の六ヶ月の教育も終わり、今度は一教より二教に転居となった。同じ各施設であったが二駅はなれていて岐阜整備学校第二教育隊と呼ばれたところである。転居してすぐ中隊付で大中隊電機中隊に入った。服部中尉が中隊長で面白い人で、今でもお付合が続いている。その中に第十中隊菅原隊が編成され、将校は先任の石井中尉と私の二人であった。

その中に少年飛行兵第十六期二次の兵が八十名入ってきて、私が区隊長として教育する事となった。教育をするといっても戦争がはげしくなり、兵士は専ら土壕を作る作業となり、雨の日などに私が学科を教える位のものである。今この飛行兵達は全国的に集まり毎年全国大会を開いている。私も一回岐阜大会に出席させてもらった事がある。団結が強く百名以上の集まりで、中に私の部下も二、三名居り六十才をこえても昔の少年飛行兵の面影を残していた。

そのうち石井中尉が他の隊に移り先任将校になったが、菅原中尉も転属し残りは私と見習士官の二人になってしまった。教育は作業ばかりであったが、空襲がひどく隊の反対側の三菱重工業川崎の工場はB29の爆撃をうけ、又隊もグラマンの空襲をうける事になった。そこで隊は疎開し、山の中に壕舎をたてる事になる。その前に先任将校の時、中隊長がいないので中隊長代理でもあったので、士官全員に外泊を許可し、一人ずつ交替で外泊させてやった。これは大変嬉しかったようで、土産を大量にもってきたものである。この頃部隊より十中隊に九九双軽の特攻機の整備の命令が下った。その頃二教には九九双軽の専門家が皆出征していなくなり、一応私が九九双軽の専門家という事で私の処にきたらしい。こちらは残念ながら機械に弱く困った末、下士官兵の優秀な人を十三名選抜しこれに当たることになった。疎開していたバラバラの飛行機をもってきてつなぎ合わせ特攻機を作るのである。大変な仕事であった。私は見ているだけで何も出さず只責任者という事であった。その頃の部品はなくなり、又感じた事だが、一つの飛行機に合う部品が見つからず何だか飛行機も名人芸で作った様であった。何とか機体が出来上がり、発動機も取り付け、試運転に入って飛行機は飛ぶ形態を整えた。いよいよ試験飛行である。ここで操縦士の

問題がある。将校を呼んではこちらが怒られるので、下士官の少年飛行兵の熟練者を呼んできた。さあ飛ぶという時になって操縦士が「山本さんあなたが整備した飛行機だ。一緒に乗って下さい」と言われた。断るわけにもいかない。これでこの世の終わりかと思ったが、「ようし一緒に乗る」と返事をした。いよいよ試験飛行の始まりである。滑走路に出て飛行機はエンジンをふかし、飛行に入り滑走路をすべり出したが飛行の体勢に入らず、左に廻って元の出発点に戻った。操縦士の下士官が「山本さんこの飛行機は飛ばしません。左に旋回して真直に飛行出きません。今一度整備をし直して下さい」と申し出た。恥ずかしながら整備不良であった。早速不備の処を直さねばならない。そこで三菱の研究所の人を呼んで見てもらったら尾翼のつけ違いであった。ボロボロの機体であったから無理もなかった。又二週間位してから今一度試験飛行を行った。今度は滑るように滑走路を走るとファーと機体が空中に上がった。ホットしたと共に助かったと思った。落ち着いてみると岐阜の空は青く綺麗なものであった。飛行場を一周して木曾川沿いに飛行し、十分程して飛行場に戻った。いよいよ着陸である。計器を見ていると赤が青に変わらない。足が出ていないのである。これは困ったと思っていたら、操縦士が翼をみて棒が出ているのを見て、「山本さん降ります」というと飛行機は降り体勢になり真直ぐに降下して滑走路に送り込んだ。無事着陸である。やれやれと私は息を吹き返した。今考えるとどんな顔をしていたかをつくづく思い出される。

この飛行機は一応爆弾をつんで沖縄へ特攻機として出発したのである。この頃よく特攻機が各務ヶ原から出発。私達はよく送ったものである。学徒上がりの操縦見習士官が服装は良かったが、乗る飛行機は練習機で、送る方も気の毒で見ていられなかったものである。特攻機整備を終えて隊へ戻ると、部隊の査閲があるという。十中隊の課題は対戦車攻撃であった。他に将校がないので兵隊を二、三回に集めて訓練し査閲に出た。講評はひどいものでボロクソ叩かれた。部隊長が来て特攻機整備をやっていたから無理もないと慰められた。午後二教の児島部隊長は東京に住まれ二、三回御逢いしたが、軍人と思えぬおとなしいいい方であった。部隊長の葬儀に出た思い出がある。

八月十五日に終戦になり、九月三日に復員式を行って、私達は家に帰る事になる。八月十五日過ぎに米国の空軍が各務ヶ原に着陸するかもしれないというので部隊長から英語を話せるのは山本さん以外にはいないので通訳を頼むといわれ、部隊長と二人で飛行場に椅子を置いて敵の飛行機を待つことになった。こちらは自信はないし部隊の命令であるし部隊長と二人で一日中見上げていた。幸いにもマッカーサーは厚木に行ったので、私の心配は杞憂に終わった。うちの部隊でも各務ヶ原の飛行場で自刃した将校がいて葬式をやったことがある。終戦後、中隊でも何もすることがなかったが、職業軍人の人は困っていた様であった。私は社会に戻る事に別に心配なく、部下に感想文を書かせたり住所を教

えたりした。中隊に住んでいたのが中隊の残りの食料品、毛布を兵に荷造りさせて送らせた。九月三日に北海道方面の兵が復員する事になり、私も東京なので一緒に乗せてもらい那加駅を発車して軍用列車で東京駅に帰ってきた。東京は焼野原で家が残っているかが心配であった。(終戦)



第二章

昭和二十年代（百貨店進出）

昭和二十年九月三日東京駅に降り立った。軍服姿で軍刀をはいた姿である。一面焼け野原を見て、その悲惨さに驚いた。日本橋迄ガレキの山である。ビルが二三残っていたが無人の有様である。日本橋を渡って人形町方面をみて喜んだ。家が焼けずに残っている。これで家を探さずにすむと思ってホットした。店は運よく焼け残り、店の人はいなかった。小売をやっていた楊枝は一袋ずつ、それも他の店がなかったから、後から後からお客が入ってきて、まずこれで安心だった。ただ極端な食糧不足であったので、品物の売り込みは勿論だが、食糧を確保しないと食べられない。それで私は時々買い出しに行く事になる。千葉の久留里や青掘に楊枝ならぬ食糧の買い出しである。その頃は汽車が混んで切符がとれず、両国駅に五時頃行って切符の予約をもらい、十時頃の汽車にのって千葉まで行きリュックに米芋を分けてもらって帰ってきた。古河にも出かけたが東武電車がオンボロで、出入り口の扉がなくリュックサックが外に出ていて振り落とされるかと思った事もあり、皆苦勞の買い出しであった。商売の方は順調に何でも売れたのであまり心配はなかったが、本業の方は楊枝ができず、専ら三島の丸妻で三島へ出かけて催促しないと品物がこないという状況であった。この頃は品物があれば売れる。品物集めが仕事であった。その内半年もすると段々と世の中が落ち着いてきて店売だけでは商売にならなくなり、いよいよ百貨店へ売り込みである。私は素人で売り込みの経験がなく、それでデパートへの売り込みの前に吉野家さんに狙いをつけて、見本をもって伺った。渡辺さんという人が早速注文を出してくれた。吉野家さんは戦前の一番良い小売

店であった。これでやや自信を得た。この吉野家さんに若旦那で吉野銀之助さんという人がいて、ヌード写真をやり面白い人であった。これで力を得て白木屋に行き注文をとった。いよいよ三越である。三越に行くと今井四郎さんが仕入にいて戦前のことをよく知っていて即座に商品を買ってくれた。これで三越と、次ぎに高島屋である。ここには黒田さんという豪傑がいてすぐに取引が出来た。戦前の実績からか、又有名店なのか、又商品不足の時代であったか、その点恵まれて大した苦勞もせず、次々と百貨店と取引を開始した。その頃の取引は官僚的で、特に三越は大変權威があった。三越の社長の岩瀬英一郎氏が三正会の折、日本に過ぎたるものは三越だと豪語していた。社員も氣位が高く問屋に対して強い態度に出たもので、少し失敗をすると呼び出されて御叱りをうけたものである。然も売れ行きは大変良くて一年中残業をして値札をつけた思い出がある。この頃は小間物（化粧雑貨）の黄金時代、会社の特注が多くこれを納品する為、又期日に間に合わせる為、苦勞したものである。又お客の接待もあり、常にお客を料理屋温泉に招待して飲み食いをしたものである。又麻雀もその為覚え高島屋の人達と湯河原を始め、お宅又はマージャン屋など今考えれば大変であった。けれども又面白い事もあり良き思い出になっている。ここで三人組について書くことにする。百貨店に注文取りに問屋が行く間に河西、小池両君と知り合う事になる。三越の注文取りに問屋が集まって、仕入れの出てくるのを待っている間に各々の問屋の人々と仲良しになった。その中のこの二人は年も同じ位、小池さんが辰、河西さんが巳、私が午と年が一つ違いで年齢が近く軍隊経験もあり、その内三人で旅行をして、ますます親密の度を増して行った。小池さん河西さん私と皆、家も新築しその度に御祝いに伺って奥様方とも懇意になった。小池さんが業界の麒麟児と言われ、中沢商店の番頭より身を興し、ヨシモト社を創立し日も出の勢いであった。河西さんも名門の出で喫煙具業界で知られ、特にその毒舌振りは定評があった。各々性質が違って面白かったものである。現にヨシモト社はつぶれ、小池さんは六十才で亡くなり、河西さんは逗子に引き込んで淋しいものになった。

第三章

昭和三十年代（駅ビル進出）

昭和三十一年に西武百貨店の堤社長と古賀本店長がきて、西武デパート内に専門店街を作るという話をもってきた。現在の趣味の街の始めである。西武の一階に銀座の専門店が入り西武のイメージアップに役立てるといものである。その頃の池袋はまだ発展せず小さなデパートがあっただけである。開店時に堤康次郎がテープを切っていよいよ商売開始である。私の所もケース二台あったが場所もよく売れ行きは大変なものであった。小売の経験はなかったが番頭の

玉崎を店長にし、大いに売上を上げる様努力した。商品も小物にしぼり、五番館の東京支店長の助けを得て新井商店と決め、面白い様に売れてすっかり小売業に慣れていった。これが駅ビル進出の始まりである。三十二年に横浜西口に進出する。これはのれんでまとまって出るというので栄太郎ようかんから話があり相談の人がすすめにきたので、一度横浜駅西口に様子を見に行った。人通りが少なく百メートル程で人影が失くなり、こんな商売できるかなと思った。相鉄文化会館は名品の先に設立開業した。すべり出しはまあまあだったけれど一ヶ月もすると売上がぐんぐんへった。のれん会の人達はどんどん退店して行った。私は出店したから頑張ろうと思っていたが店員を集めるのに苦労した。文化会館には藤井君というヤリ手の面白い人が事務所に居り、春秋の旅行は楽しいものでした。会長は西川の折井さん、相鉄の片岡専務と続き面白い人材がそろっていた。よく商売は売れないが会は盛んと話していたものである。その後宣伝委員長を頼まれ又副会長を兼任した事もある。

文化会館の商売はあまり売れず宣伝委員長はお叱りばかり受けて、わりにあわない仕事であった。いよいよジョイナス開店である。その前にジョイナスの開店セールをやった。これが開店以来の成績で皆さん喜ばれた。その後決算で赤字となり相鉄社長の穴水さんの処に頼みに行つて解決をしてもらった事がある。ジョイナス移りに当岡副社長の好意により良い場所に出られた。横浜店は人通りが大したもので好場所である。それから一年蒲田への進出が始まる。

三十七年蒲田駅ビルの足立さんが勧誘にきた。その頃蒲田村といわれ大分印象が悪かった。横浜、大森に出店したが成績が上がらず、一つ大きく羽ばたく必要があると思い、出店する事とした。かの開店が傑作であった。すごく人が入りシャッターを閉める程で、私の店前は人が入らない様になった。当時駅ビル西宮営業課長と馬鹿に気が合つて色々世話になった。それで会計委員長を引き受ける事になった。他の辻さん、今泉さんが亡くなり、久保、松岡両君が隠退して淋しくなった。元気な人は森鉄太郎副会長だけである。蒲田駅ビルも田子、白石、香川、平出と変わり現在の百瀬と皆仲良くなり、蒲田駅ビルは商売の中でも親しい所である。

その前に大森駅ビルにも出した事がある。名前は山王会館と言って新堀社長が個人で経営していた。社長は個人経営で不動産屋さんであった。それで退店した時、保証金を返して貰う為、大変苦労した。何月何日と言っても行つても金がないという始末で、毎月伺つても何時も金がないというばかりで半年の間、毎月月末に集金に伺い、ようやく保証金二百万円を返して貰った。集金の苦労の一番手である。

次に蒲田の紹介で鶴見駅ビルに出店した。このビルは始め募集したが参加する店が少なく、今でも感ずるが有名店はほとんど入らなかった。二、三年成績が悪く大バーゲンを秋にぶつてようやく息をついた。これが五割引きバーゲン

である。然しこのビルは小さいなりまとまっていた。

次に出店したのが目黒駅ビルである。目黒駅には蒲田の雨宮さんの紹介で出る事になった。このビルは有名店の出店が多く、駅ビル自体の売り上げもいいが、一軒当たりの売り上げは相当良いものであった。出店後は売上は順調で各店の売り上げも順調であった。営業部も滝さん、向山さんが担当で親切にしてもらった。二度程場所を移動したが、店長の松田さん一人で頑張った成績は順調だった。

亀戸駅ビルの出店は目黒駅ビル紹介で出店したが改装時に場所が悪くなり売上がらず退店した唯一の失敗である。

第四章

昭和四十年代 若葉会木曜会

四十年代に入ると景気が落ち着きをみせはじめ商品の盛衰が始まった。本業の楊枝の方は相変わらずであったけれど売店の伸びが鈍くなった三十年の後半に店は地下工事の為、芳町の高木清心丹に仮住まいとなった。売店と百貨店があったので売上の方は減らなかったが社員の移動が激しく店員の確保に骨が折れた時代である。二十三年頃組合に若葉会が出来た。組合の若手の集まりである。多くは組合の役員の子弟であった。人数は二十人皆意気の良い集まりであった。実行力があり、この会は旅行研修を毎年いろいろ企画し元気であったので組合の運動会お葬式等に大変役立った。皆若く元気であったので組合の大きな原動力になった。然し海渡一郎、鈴木卓雄という有力どころが三十六才で相次いで死んでいった。今でも残念でならない。四十年後までになると半数は亡くなり半数は商売をやめ、なつかしいメンバーは殆ど亡くなり残っているのは井田、南部、私位で大変淋しいものである。又全盛期に木曜会を結成した。これは百貨店対策でデパート問屋の集まりである。これも推薦されて会長となった。これは対百貨店という事で却々辛い仕事であった。三越の細野さんとやり合ったのもこの頃である。この会も化粧雑貨の売り上げ不振と共に会員が商売をやめる人が多くなり又年老いて、現在はなくなり、コナン、水野の両社が残っていたが廃業となった。わずかの間に栄枯盛衰、倒れるものが増えて木曜会も二十年後で解散した。



平成元年2月8日 東都のれん会 於熱海 大観荘

第五章

昭和五十年代 町会長、神社総代、信用金庫理事

五十年代に入り父が亡くなって長い専務時代が終わって社長になり、一雄が専務となって新体制が出来た。町会は二十年位やって顧問になった。町会長となって他の町会長と面識を深め、又小網神社の責任総代となって色々町の仕事に尽力する事になった。町会長は却々大変であり、区役所の出先機関になって居り毎日書類がくる。連絡事項が多かった。又消防署、警察署、税務所と次々用があつて、私には無理だと思ひ次の人に代わってもらつた。尚現在も色々役をつとめている。只明治座の三田社長はじめ各界の社長さん達が町の為に熱心に仕事をされるのを見ると頭の下がる思いがする。

次に小網神社、今神社総代を永くつとめている。先代の宮司とはすっかり酒仲間となった。強気で口の悪い宮司であつたが、却々のきれ物で苦勞して神社を守つていた。町会と話し合いがうまくいかず町会長と宮司さんが交互にきて主張するのでまとめるのに苦勞したものである。先般急死されたのには本当に驚いた。今は若い宮司に代わり、小網神社はお参りに来る人が大変多く、日本橋で有名になり、総代として大変喜んで居る。今後益々頑張つて良き神社になる事を希望している。

又日本橋信用金庫の外勤理事を十八年間勤めた。父がやっていたからか理事長が代わる前に外勤理事を頼まれ引き受けた。当時は商売も売店が五つありデパート商売もやつていて内容も良かった。村本理事長はじめ役員とも懇意になり、役員会を毎年伊東温泉でやつていた。今考えると金融が楽だったので会計をのん気にやつていた。それで色々な事ができたと思う。

日本橋信用金庫も合併で失くなり旧職員はお気の毒である。これも国の政策で仕方がなかったかと考える。



第六章

平成年間 新ビル建設新店舗

平成に入って富士銀行よりビル建設の話がきた。私はあまり賛成しなかったが何分にも相続税の問題があり又仮店舗で問題があったが、富士銀行の杉本さんが熱心に話を進めた。仮店舗は小さかったが人形町駅に近く又矢島さんが大変親切な方であったので此処に小網町と変わらず商売が出来るようになり足かけ三年の間、仮で商売することになった。建設費は富士銀行から借入れ、設計はGK設計、建設は創美建設になった。当時はバブル最盛期で土地、株の値上がりもひどく、銀行も融資にやっきになっていた時であった。GK設計も創美建設も伝統ある店の為という事で大変力を入れてやってもらったものである。今考えれば大きな事業であったが、販売に売店が七軒あり本店が少し位落ちても心配ないという読みがあった。仮店舗の商売も場所が良かったせいもあってあまり落ちずに心配もなく工事は順調に推移して平成三年に完成した。三月の頃であった。

新築披露には三越の市原さん初めのれん会から山本会長さん又矢田区長さんもみえて祝辞をして頂いた。生涯の最良の日であったかも知れない。三越については井上総務部長さんに世話になって社長以外の全役員に出席して頂いた。新店舗は華やかに開店したが、テナント募集に苦労している。バブルが崩壊して大不況に入ったからである。時代の変化が大きな波となって入り込み、不透明な時代に入ったのである。



附録1 旅は道づれ 世は情け

(一) 天城の温泉

大学一年の頃、親友の児島さんと春休みに伊豆に旅行した。地図もなく本当の歩き任せであった。夕方近くになって山中にて困った事となった。丁度その時、温泉旅館が見えた。早速交渉を始めた。此処の宿屋は有名な伊豆の天城の落合楼であった。交渉の最中、おかみが出てきた。そして曰く、うちには学生さんを泊めるわけにはいかない。条件として新婚旅行に来てくれると約束してくれるなら特別にお泊めしましょうと言ってくれた。本当に親切な言葉で感激して泊めてもらった。学生には相応し難く立派な部屋で、料理も一流で大変助かった。このおかみの親切を忘れず、新婚旅行は伊豆の天城温泉の落合楼に出かけた。

(二) 前橋旅行

商大の同級の小関君が前橋へ赴任したと連絡を受けたので、三越の支店の前百貨店へ商売に出かけた。日銀に顔を出したら支店長だった。各銀行の支店長が挨拶に来ていた。大したものであった。それで、伊香保温泉で級会をやったが、日銀支店長の威力で課長さんが一生懸命働いてくれて、よき級会ができた。その以後、小関君の世話で商大の十七年会もやった。私も度々前橋に商売に行った。

附録2 父母と兄弟、妻と子供達

父は愛知県一宮無量寺の生まれである。戦時中岐阜にいた頃一度一宮を訪ねた事がある。野田一家に私が行った時大勢の人が集まってくれて喜んだものである。父は幼い頃、東京にでて人形町の小川屋呉服店に住み込みで入り番頭格に上った頃、母が見染めてさるやに養子として入った。それで父母共に養子である。その後、父の活躍で店も順調であったが、関東大震災で大変苦勞をしたもので、その頃保険もなく大勢の店員を抱え本当に苦勞の連続だと思う。金の件は関西で都合したらしい。関東地震の後は空襲である。空襲の時は食糧難で買い出しに苦勞したらしい。戦後はのれんのお蔭で段々と良くなり町会や組合など活躍をした。又浜田長唄の稽古をしたりして下町の商家の大旦那の風格を偲ばせる様になった。ただ昭和の不況の折、私らにも覚悟をなさいと言われた事があった。父は商売は厳しくとくに経費についてやかましかった。

母は商家のお内儀として日本髪をゆい二、三人の女中さんを使いオットリとした商家のおかみさんであった。あまり苦勞する事もなく、おけいこ事や芝居見物とかノンビリした人であった。母は七十五才で亡くなった。肺ガンだった。父はその後も元気で妹達の世話で八十七才まで高齢で生き延びる事ができた。その間表彰を三度受けた。万安楼、パレスホテル、帝国ホテルと盛大に御祝い

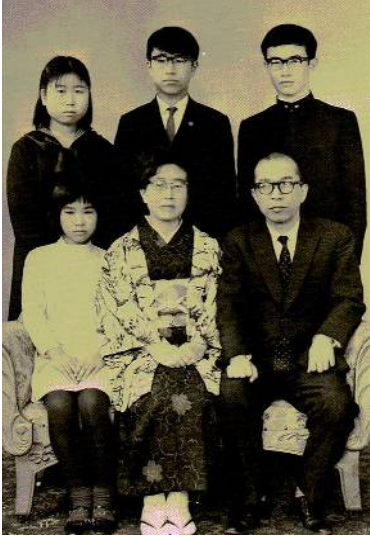
をあげる事ができた。町会長を二十五年もやり組合の副理事をやらせて貰った。皆様のお蔭と感謝申し上げます。

妹達は嫁にいけず気の毒であるが今日のさるやに大変貢献されている。婚期が戦争中であつたのでめぐりあわせが悪く、いわゆる戦争の犠牲者である。健康は良く、子供や孫の面倒をみてくれた。

昭和十八年八月、兄登志夫が病気で亡くなった。二十八才であつた。兄は私の二つ上で府立一高、明治学院を卒業して家をついだが軍隊で体をこわし、二、三年病院に入っていたが、その後家に帰り店で伏していた。兄は運動神経が良く陸上競技、水泳、バレーボールの選手をやり、顔付もよく却々もてたものである。入営が旭川でハルピンに転属され満州で苦勞したものである。ハルピンで病気になり旭川に帰ってきた。それから病気が続いて若い命を失う事になった。戦争の犠牲者である。私が軍隊にいた時に亡くなったので、軍隊に休暇をもらい葬式にかけつけた。通夜をして二日後部隊に帰った。

昭和二十三年三月十四日、福田富美子との婚礼を精養軒で行った。この話は児島君のお母さんがもってきた話で御見合をして決めたものである。学歴もよく横山町の呉服問屋で家柄もよく、家に相応しいと思つたものである。初めは日本橋で父母と一緒に住んでいたが、子供がお茶の水小学校、竹早小学校に入ったので文京区の小日向に移り住んだ。もう二十年以上になり小日向でも古顔の方になった。七十才をすぎても元気で書道をよくし孫の習字をみたり、書道会に出席し、いろいろ友人と仲良くしたものである。孫も八人と増えた。子供は東大、一橋、東京女子大、学習院と卒業して、のれん会の人には「学者の家の様ですね」と言われた事がある。年一度の新年会の集まりでも大勢で元気で楽しいものである。





この人 この仲間

同じバレーコートで汗を流した学生時代の仲間が半世紀を過ぎた今でも、年に一二次は顔

材業の大之木ダイモ社長の大之木英雄さん(75)、よろじ店のさるや会長の山本貞治さん(78)でみな七十代。マネジャーだった山本さん以外は歴代の主将たち。もちろん先輩・後輩の上下関係は厳然と存在する。

大学を卒業してからもお互いに連絡を取り合っていたが、正式に会として発足したのは一九八二年のこと。当初は「バレー

村井勉さんら

馬齢会

をそろえる。アサヒビールと西日本旅客鉄道(JR西日本)の名譽会長で、日本バレーボール協会会長も務める村井勉さん(70)ら東京商科大(現一橋大)のバレーボール部OBでつくる「馬齢会」である。

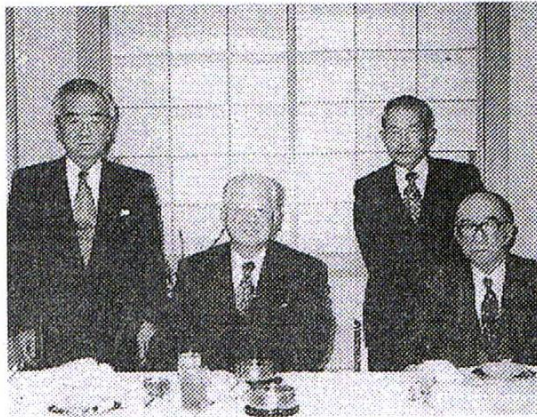
メンバーは村井さんのほかに、伊藤忠商事相談役の米倉功さん(75)や、三和銀行相談役の川勝堅二さん(73)、総合木

バレーに明け暮れた

青春の思い出話に花

会」の名称でスタートしたが、変えた。

メンバーが七十歳を超えた三年ほど前に、「いたずらに馬齢を重ねてきてしまった」(村井さん)との反省からいまの名称へ



学生時代のバレー部員に戻る「馬齢会」の面々(左から2番目が村井さん)

け暮れた青春期の思い出話に花を咲かせたり、世事に意見を戦わせたりする。二日目には早朝からゴルフ場へ繰り出して競う。これまでメンバーが欠席したことはほとんどないという。

村井さんは「二日間の無礼講の間は、何でも言い合える気安さがある」と相手を崩す。さすがに今、一緒にバレーを楽しむというわけにはいかない。手にする白球はバレーボールからゴルフボールへと変わってしまったが、学生時代にできた連帯は星霜を経た後もなお輝きを失わずにいる。



「東海道四谷怪談」の最初の場面、浅草觀世音(浅草寺)境内の場には、お岩の妹のお袖が働くようじ店が登場する。江戸時代、ようじには「つまようじ」と並んで、端を砕いて木の繊維を房状にした「ふさようじ」があった。歯ブラシやお歯黒をつける化粧用具として普及していた。

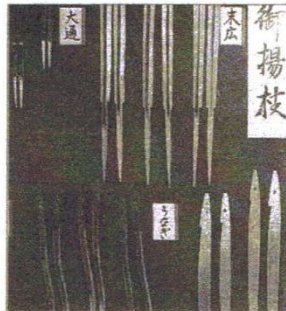
四谷怪談の作者、鶴屋南北が数々の歌舞伎作品を送り出した江戸後期の文化文政期、浅草寺の境内には、生活必需品のようじを売る店がいくつも出ていた。そうした江戸時代の生活習慣をとらえて事業を営んできたのが、東京・日本橋小網町のようじ専門店、さるや(東京・中央)だ。創業はようじが江戸庶民に普及し始めた1704(宝永

200年企業

—成長と持続の条件—

時代に合わせ ようじ革新

さるや、工夫重ね需要開拓



細工ようじに職人の技

さるやは東京・日本橋小網町の店内に、職人たちが技を競って製作してきた「細工ようじ」や「ふさようじ」などの歴史的な作品を展示している。細工ようじは主に菓子ようじとして茶席などで使われる。展示のなかで、うなぎの形をしたようじ(写真下段の左側)は実際にうなぎ店が使っていたという。今も細工ようじを何種類も販売している。

ようじを削って売っていたことから、この名がついたとの説もある。明治に入り「ふさようじ」は次第に姿を消し、和菓子にも使う「菓子ようじ」の需要が増加。だが広く普及していた「ふさようじ」の需要がなくなったことは、

よつじ一筋に300年余り。さるやは現社長・山本一雄氏の父、貞治氏で7代。現在、つまようじは一般にシラカバを材料にした機械生産品だが、さるやはつまようじも菓子ようじもクロモジを手で削って作っている。香りがあうえ、理由がある。ひとつは品質の革新だ。「職人が一本一本、木の目

撃になり、廃業が相次いだ。現在のさるやは全国でただひとつ残ったようじ専門店も使われるクロモジに切り替えた。

に沿って削ることで、弾力り出し「ようじ」など。「よ性があって折れにくくなると山本社長は話す。さるやと言えば「クロモジのようじ」でおなじみに「勝負」(山本社長)。ちりめんの携帯用ようじ入れも用意している。

さるやの歩みは、ものづくりやマーケティングなどの変革の歴史でもある。現在、山本社長が力を入れて

商品企画にも知恵を絞る。たとえば、ようじを取めた小さな桐(きり)箱に、「金千両」と記した縁起物の贈答用商品。「金千両」は代々の当主が一つ一つ書き上げる習わしという。その年の干支(えと)を桐箱に描いた年賀用もある。ほかにも都々逸を書いた小さな紙でようじを巻いた「辻店(つじや)ようじ」をおみくじのように桐箱を振ってようじを取り出す「振(編集委員 水野裕司)

手作り
土産

下町の
老舗

◆小網町

さるやの
黒文字楊枝

さるや

住所 中央区日本橋小網町18-10

電話 03・3666・3906

営業 9時～17時/日曜、
第3土曜、祝日休

江戸時代、楊枝見世と呼ばれる楊枝店は浅草寺境内だけでも250軒あったという。当時は歯ブラシとして使われていた。現在、日本で唯一の楊枝専門店となったのが、日本橋小網町にある創業約300年のさるやだ。

さるやの楊枝は、クスノキ科のクロモジの若木を削って作られる。クロモジは香りが良く弾力性に富み、江戸では昔から楊枝はクロモジでなければ、とされた。

「使い捨ての楊枝にさえこだわるのが江戸っ子の粋だった。今も『これできゃ』と一言でくださるお客様の言葉がうれしいね」と、8代目の山本一雄さん(62)が目を細める。金

千両」と書かれた桐箱に入った黒文字楊枝が贈答用に人気だ。楊枝は大阪や千葉の職人が手作りし納品するが、箱の文字は歴代店主が手書きするしきたり。店では93歳になる7代目の山本貞治さんが力強い筆運びで千両箱を仕上げている。江戸の粋が伝わってくる。



千両箱入りの黒文字楊枝は7種類(600円)。千支を描いた桐箱入りなどもある



クロモジの楊枝は江戸っ子のこだわり。もらってうれしい桐の千両箱の粋な贈り物

ひとつひとつ、リズムに乗って桐箱の表書きを仕上げる山本貞治さん。筆を運ぶ仕事も、休憩中に煙草を楽しむ仕事も何とも粋だ

いらっしやいませ

「細く長くしとやかに」が
モットーです



ゲスト さるや 代表取締役会長

山本貞治さん

プロフィール
一九一八年、東京生まれ。東京商科大学（現一橋大学）卒。宝永元年（一七〇四年）創業の日本で唯一の楊枝専門店「さるや」の六代目。「猿屋の楊枝」は江戸名物のひとつに数えられ、三百年にわたって高品質にこだわり、粋で繊細な楊枝を作り続けている。
<http://www.sanyu.co.jp/>

聞き手・渡辺孝之（六代目当主）
六代目 今日、お越しいただきありがとうございます。父が江戸の物にこだわって、楊枝なら「さるや」とさんと決めておりました。本当に長い間のお付き合いですが、いつもお元気で江戸っ子ちゃまさまきでいらっしやいます。旦那

は、何年のお生まれですか？

山本 大正七年、一九一八年です。今年九十一歳で、もう曾孫もいます。

六代目 その二世紀ですね（笑）。私たちが小さい頃から「さるやさんの楊枝」といつてきました。父はときどき「黒文字」といつてました。楊枝のことを黒文字というんですか？

山本 黒文字というのは、楊枝にする木の名前なんです。

六代目 楊枝は、柳の木で作るのだとばかり思っていました。

山本 黒文字のほうが、香りがする。だから、香料にも使われるんです。

六代目 黒文字の木は、日本全国どこにもあるんですか？

山本 本州から四国、九州などの低い山に生えています。でも、北のものは木が堅いから削りにくくて駄目。楊枝に使うのは、四国から九州の南のものが多いですね。

六代目 そうなんです。私は今日始めて勉強しました。ところで、屋号の「さるや」というのは、どこから？

山本 私のところは宝永元年、一七〇四年の創業なんです。元禄時代の文獻に「猿は歯が白き故に楊子の看板たり」という文句がありまして、そこに由来する説と、さるやの主人が、大道で小猿を背にのせて黒文字を削ってみせたことに由来するという説があります。

六代目 そういえば、猿は歯が白いですね。

山本 ええ、野生の猿は歯が丈夫なんです。江戸時代には、「さるや」という楊枝屋が何軒もあつたんですよ。うちは照臨町通り、今の小網町に店があつて、「りふり町のさるや」として文獻にも残っています。

◆府立一商の思い出
六代目 学校を卒業されてからは、すぐにお店を継がれたんですか？

山本 いえ、私は次男ですから、長男が店を継ぐものと思つて、安心して大学に行つたんです。あの頃、下町は小学校を終ると高等小学校に二年。これがほとんどで、中学に行くのはあまりいせんでした。

六代目 中学はどちらですか？

山本 府立二商。渋谷の道元坂の上でした。当時、一中、一商っていうのは名門中の名門でしたから、日本橋の商人の息子たちがずいぶん通つていました。

六代目 その頃、渋谷まではどうやって通つていらしたんでしょうか？

山本 両国から渋谷まで、市電です。

六代目 そりゃあ、ずいぶん長く乗つていらしたんでしょうね。

山本 四十分くらいかかりましたよ。学校が八時に始まるんで、七時には家を出ていました。私が一番関心したのは、当時、給食っていうのがあつたんです。おそらく、一商だけです。



六代目
へえ、一般の学校ではまだ給食が無かつた時代に。どんな献立なんですか？

山本 お鉢とお鍋が教壇の下にあつて、自分でお茶碗を持つていつて、よそろんです。だから、食べるのが早いやつは、何杯も食べるのがよくわかる（笑）。

六代目 これは貴重なお話ですね。

山本 校長が、父兄に下町の商人の人たちが多いので、夜まで忙しく働いて弁当をつくるのが

大変だろうというところからの発案でしてね。

六代目 それは立派な校長先生ですね。

山本 ところが、三年のときに校長が代わりまして、熊本から来たのは同種主義者。今まで体操だったのが、軍事教練になつてね。商業学校なのに、多摩川で自衛隊みたいな訓練をしてました。今、考えると本当にひどい世の中だったなあと思ひますね。

◆戦中戦後を乗り切る
六代目 東都のれん会というのは、東京で百年くらい

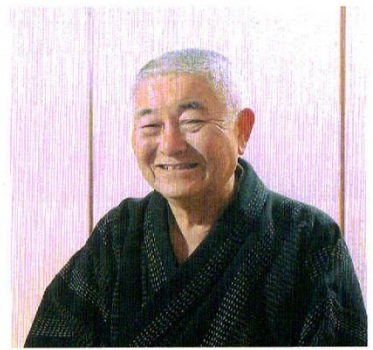
お商売をしていて、正当に三代以上続いている店という規定があるんですが、のれんを守るには、ご苦労があつたのではないですか？

山本 大学を繰り上げ卒業して上野学校にいたときに、兄貴が亡くなつたんです。跡継ぎがいなくなつたので、岐阜まで父が来ましたよ。それで、みんなが「戦地希望」つて書くのに、私だけ「内地希望」つて書いて、将校からひどいピンタをくらいました。そんなこんなで、復員して帰つてきたら、番頭さんたちがみんな徴用でとられて店に誰もいなくてね。親父と私と二人だけ。

六代目 うちもそうだったと聞いています。

山本 九月に岐阜から帰つてきて、東京駅で電車を降りたら、どーと焼けていて、見えるのは三越の建物だけ。うちはどうなつたのかかわらないまま、歩いていたら残つていたんです。江戸橋から人形町の界隈まで、偶然焼けずに残つたんです。





六代目 よかったですねえ。うちは関東大震災と太平洋戦争で二回、店が焼けているので、先代は本当に大変でした。だから、おまえは苦労を知らないとも怒られていました(笑)。
山本 関東大震災のときは幼稚園でしたが、店

が焼けて、翌日、父親と宮城で落ち合いました。私も「なんにもない東京を二度も見るから」と、よく息子にいますよ。
六代目 戦後、食うか食わずの状況で、楊枝の需要というのはあったんですか？
山本 まわりが焼けちゃって、三越もまだ営業していない時期には、在庫の楊枝や歯ブラシを売っていました。楊枝一袋、歯ブラシ二本ずつしか売らないのに、品物がないので皆さん並ぶんです。終戦直後というのは、そういう時代でした。でもね、二年もたつと売れなくなって、デパートでの取引を始めようと、まず三越から売り込みに行きました。

◆日本の楊枝は世界

六代目 お店にうかがうと、いろいろな楊枝があるのでびっくりします。松葉や鯉の形をした楊枝などは、江戸時代からあるんですか？
山本 いやいや、昭和になってから私らが考え



たの。私よくいうんですが、老舗っていうのは何が新しいことを考えなくてはつべれちゃうんです。花柳界で宴会用を使う辻占の楊枝なんというの、親父が大正時代に考えました。まだテレビがない時代で、宴会が好きなお父さんばかりいたんですよ(笑)。

六代目 ここにある辻占を、ひとつ測いてみますと「縁は結ぶの神さまませ。私の体は主ませ」。粋ですねえ(笑)。
山本 これは大正時代に流行ったんだけど、今は、若い子が面白って買いに來ます。
六代目 若い人って、こういうのが好きそうですね。
山本 それが、婚礼の引き出物に使うっていうんですよ。
六代目 はあ、それはヒットですね。このお馴染みの千両箱も、お父さんの代からですか？
山本 ええ、私が中学のときからです。五十年以上やっていますから、この字が書ける。直に木の蓋に書きますから、最初はうまくおさまらない。箱も大きさが違うのが七種類くらいあるんです。
六代目 桐箱に黒文字がおさまっているのが、江戸らしくていいですね。これをお正月のお年賀に差し上げたら、江戸の粋がわかる人に喜ば



れました。
山本 いまね、桐箱も変わった形をしたのをやる人がいなくなりました。おじさんがつくになると、継ぐ人がありません。まりいまま六代目、うちなんかも、田んぼにうがたくさんいた時代はよかったです。結局、農薬のない

とこで養殖しなければいけないので、コストもかかります。
山本 楊枝も全部手作りですから、せいぜい一日二千本しか作れません。本當にうまい職人さんがいなくなってしまうんですね。
六代目 とこで、楊枝って西洋にもあるんですか？
山本 ええ。私の友達が世界中から集めて持ってきてくれたんですが、ろくなものはない。日本の職人ならではの器用さで実によくできています。世界一ですよ。

◆江戸時代の楊枝

六代目 昔、楊枝っていうのは歯ブラシとして使われていたとか？
山本 そうです。「房楊枝」といって、お歯黒するときに使っていました。歌舞伎で髪結新三が花道を出てくるとき、髪に挿しているのが房楊枝です。先代の菊五郎だったかなあ、小道具

がうまくつくれない頃は、うちに借りに來てましたよ。
六代目 はあ、そうなんですか。房楊枝っていうのは、どこから来たものなんですか？
山本 文献によると、インドから中国を経て日本に入ってきたのですが、最初は貴族や坊さんが口をすすぐときに使うものでした。いわゆる庶民が使うようになったのは、江戸時代からです。
六代目 それでは、需要も増えたでしょうねえ。
山本 江戸時代には、日本全国にたくさん楊枝店がありました。
六代目 それで今は、三百年続いているさやさんだけ。
山本 他の店がみんなつぶれて、うちだけになっちゃいました。別に独占企業にするわけじゃなかったのね(笑)。
六代目 さやさんのお店、楊枝屋さんにしてはすごくモダンな建物で、日本橋の街で目立ち

ます。
山本 平成四年に建て替えました。最初はモダンすぎたんですよ。抗もありましたが、展示ができるスペースもあってよかったと思いますよ。
六代目 新しい商品の開発だけではなく、日本橋めぐりと文化を大切になさっているところがいいですね。いまや貴重な存在です。さやさんからアイデアをいただいて、うちも頑張りたいと思います。これからもどうぞ、よろしくお願いたします。

